

主 題：選ばれたイスラエルの罪
聖書箇所：ローマ人への手紙 9章1-5節

「主なる神の恵みによって罪赦された人は、その救いを決して失うことがない。」と、パウロはそのことをローマ書の1章から8章まで、特に、8章で教えてくれました。イエスによって数われた人は絶対に永遠に救いを失わない、その救いは永遠のものであると、このすばらしい約束を主は私たちに与えてくださいました。このように1章から8章まで語ってきたパウロですが、9章になるとテーマが変わります。イスラエルのことについて話し始めるのです。なぜ、パウロはこのようにここでテーマを変えたのか？確かに、学んでいると疑問を抱きます。パウロがここでテーマを変えたのは、このようなすばらしい祝福を拒んでいるイスラエルの人々、このような祝福、罪の赦し、救い、偉大な救い主を拒んでいる現実を見る時に、人々はいろいろな疑問を抱いたからです。いったい、何が起きているのだろうか。イスラエルは神によって選ばれた国である、神が特別に選んだ国である、たくさんの約束が与えられた国である。その国、その民が、なぜ、このように神に逆らい続けているのか？待望の救い主が来られたにもかかわらず、その救い主を受け入れることもなく、却って、救い主を十字架に磔にしました。救い主の約束を知っていた彼らがその救い主を殺してしまった。しかも、この救いのすばらしいメッセージを聞き、すばらしい救いが備えられていることを聞いても、イスラエルの人々はそれを受け入れようとしない、なぜなのか？いったい、何が起きているのだろうか？パウロはこのような疑問を抱いていたローマ教会の人々に答えを与えるのです。

イスラエルはなぜ神に逆らうという罪を犯して来ているのか？また、イスラエルに対する神の約束はいったいどうなってしまったのか？たくさんの約束があるけれど、それらはどうなってしまったのか？ある人々はこのように考えたようです。神がイスラエルに約束されたことを、神はもしかすると守れないのではないかと。そのような疑問にもパウロは答えを与えています。また、ある人々は、神はイスラエルを見捨てられた、神はもうイスラエルを退けてしまわれたのではないかと？つまり、いろいろな現状を見て、その当時のローマ教会はいろいろな疑問を抱いたのです。パウロはそれに対して答えを与えています。

実は、11章を見ると、このローマ教会は大半が異邦人でした。ユダヤ人の信仰者もいたのですが、大半が異邦人です。そうすると、彼らの中に、自分たちはユダヤ人たちよりも神の前に喜ばれているのではないかと、自分たちの方が偉いのではないかと、そのようにイスラエル人を見下すような動きもあったようです。面白いことです。旧約の時代を見ると、常に、ユダヤ人たちが異邦人を見下していました。新約の時代になると今度は、異邦人がそのようにユダヤ人を見下すようになってしまうのです。どちらも間違っています。でも、このような現状を見ていろいろな疑問を抱いたローマの教会に対して、パウロは答えを与えるのです。なぜ、イスラエルの人たちがこのようなことをしているのか、神はもうイスラエルに対してすべてのことを見切られたのか？パウロはこの大切なことをこの9章から11章で教えてくれます。パウロは非常にすばらしいことを教えますが、同時に、もう一つ言えることは、パウロが語った「信じる信仰による救い」というこの救いのメッセージに反対していたイスラエルの人々、彼らは「行ないによる救い」を語っていましたから、その人たちにパウロは福音を語り続けて行くということです。では、9章からごいっしょにみことばを見て行きましょう。

☆救いを拒んでいるイスラエル人に対して

A. パウロのイスラエルへの思い 1-3節

まず、9章の1節から3節には、パウロがイスラエルに対してどんな思いを持っていたのか？そのことが記されています。1節には、パウロがどんな人物だったのか、それを垣間見ることが出来ます。

1. 真実の証言 1節

1節「私はキリストにあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によってあかししています。」、パウロはこれから自分が述べるのが真実であるということを主張するのです。そのために彼は二人の証人を引き合いに出しています。一人は「キリスト」であり、もう一人は「自分の良心」です。この二人の証人をもってパウロは「私の言っていることは真実であり嘘ではありません。」と主張するのです。なぜ、そこにパウロ自身の特徴を垣間見ることが出来るのでしょうか？

(1) キリスト

皆さん、パウロは「イエスが私の証人だ。」と言いました。イエスは私たちの心の隅々までご覧にな

っておられます。私が考えているすべてのことをご存じの方が私の証人であると言うのです。パウロがどれ程いつも神を見上げて神の前を正しく生きようとしていたのか、どれ程神を恐れる者であったのかということをおぼろげに知ることが出来ます。なぜなら、心の隅々まで見ておられるイエスが私の証人だ、自分の言っていることが真実だと証明してくださるからと言うのです。それは彼が本当にいつも主を見上げていたこと、恐れていたことの証です。神の前に喜ばれる生き方をしていたパウロの姿をここに見て取ることが出来ます。私たちもそのような信仰者でありたいです。「私の言っていることはイエスが証人です。」と。そのためには私自身が神の前を正しく歩み続けることが必要です。

(2) 自分の良心

二つ目に「私の良心が証人だ」と言います。イエスを信じる前の私たちの良心は、残念ながら、罪に汚れていました。ですから、イエスを信じていない人が「自分の良心に従って生きて行く」と言っても、それは不完全です。なぜなら、それは罪に汚れているからです。テトス1：15を見ると「きよい人々には、すべてのものがきよいのです。しかし、汚れた、不信仰な人々には、何一つきよいものはありません。それどころか、その知性と良心までも汚れています。」とあります。ですから、良心が汚れているから、その良心によって神の前に正しいことが選択できるのか？出来ません。ところが、イエスを信じるとは、その汚れが洗われるのです。きよくされるのです。

パウロはヘブル人への手紙9章の中で、いかなる行ないも私たちの良心をきよめることはないと言っています。9：9「この幕屋はその当時のための比喻です。それに従って、ささげ物といけにえとがささげられますが、それらは礼拝する者の良心を完全にすることはできません。」、しかし、イエス・キリストの血しおによって、つまり、イエスの死、救いによって私たちの良心がきよめられると言います。9：14「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。」、ですから、救われた者は神に喜ばれることを見極めて選択して行くことが出来るのです。新しく生まれ変わったからです。しかし、パウロは救われたからと言って、その良心が示すことすべてに従って良いのかどうか、そうではないと言っています。

救われた私たちの良心はきよめられました。しかし、私たちが神の前に正しく歩んで行くためには、その良心がいつも聖霊によって支配されていることが必要なのです。だから、パウロは1節で「私の良心も、聖霊によってあかししています。」と言うのです。つまり、パウロ自身の良心はいつも聖霊が支配し、聖霊によって導かれていたということを使うのです。だから、聖霊によって常に満たされている人、支配されている人のその良心は、いつも神が喜ばれることを考えてそれを選択するのです。ですから、これだけ見ても、パウロはいつも神を恐れる者であったし、彼はいつも神に支配していただくとしていました。自らのすべてを明け渡して神に導いていただくとしていた、そのような人物であったということをおぼろげに知ることが出来ます。すばらしい信仰者だったのです。まさに、私たちが模範として歩むような歩みをパウロ自身がしていたのです。

2. 真実な愛 2-3節

そのパウロが「私はこのイスラエルの人々を愛しています」と言います。彼のその真実な愛が2-3節に記されています。「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。：3 もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願っています。」。「私の同胞」とは私の兄弟たちのことです。肉による同国人、つまり、パウロは私は自分の同胞たち、自分の同国人、つまり、このイスラエル人のことを愛していると言っているのです。パウロはそのことをローマ11：1でもこのように言っています。「すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。」と。パウロは「私はイスラエル人でイスラエル人のことを愛している。」と言ったのです。パウロがこのように言ったのは、恐らく、ユダヤ人から見ると、パウロはどうも異邦人の方にばかり行っている、もう、私たちのことはどうでもいいかのように思った人がいたからかも知れません。ですから、パウロは「とんでもない。確かに、私は異邦人のために召されているけれど、—そのように9-11章でパウロは教えますが、—でも、私は自分の同胞たちを愛している。私はイスラエル人のことを心から愛している」と、そのことをここで訴えるのです。

彼がイスラエル人を愛していた証拠は何かと言うと、パウロがイスラエル人たちにとって最も大切なことを望んでいたことです。イスラエル人にとって最も大切なものは何でしょう？人間にとって最も大切なものは何でしょう？救いです。ですから、パウロはここでイスラエルの人々の救いを願っています。

(1) 悲しみ

パウロは最初にこのように言います。「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。」、

現状を見たとき、神に逆らっているこのイスラエル人を見たときに、私の心には苦しみと痛みがあったと言うのです。パウロは彼らのことを見るたびに、また、彼らのことを考えるたびに、常に彼の心は悲しみ彼の心は痛み続けたのです。それは愛するイスラエルの人々が、今、永遠の地獄に向かっていることを知っていたからです。だから、心が痛み悲しんだのです。

信仰者の皆さん、あなた自身にそのような思いはありますか？あなたの家族、友人たちがこのイエス・キリストの救いをいただいていなければ、罪が赦されていなければ、確実に彼らは今永遠の地獄へと向かっているのです。その現実を見つめたときに、あなたの心は痛んでいますか？あなたの心は悲しみに溢れていますか？「神さま、何とか彼らを救ってください！」と。私も子どもたちが寝ているところを見る時に、祈ることはただ一つです。「神さま、彼らを救ってください。」と。どんなものよりもすばらしい贈り物、愛する者たちに残せるものは救いです。どれ程多くの富を残しても、それは永遠に続きません。しかし、永遠に続くものは「永遠のいのち」です。パウロは愛するイスラエルの人たちの多くが今もなお永遠の滅び、地獄に向かっている姿を見て黙っておれなかったのです。「仕方がない」とは言わなかったのです。「1回は語ったけれど彼らは拒んだから仕方がない。」とは言わなかったのです。彼らが地獄に行くことが耐えられなかったのです。

(2) 願い

そこで彼はこう言います。3節にはパウロのこの人々に対する強い願いが記されています。彼らが救われて欲しいという願いです。「もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。」、「もしできることなら、…」私が彼らに代わって地獄に行きますから彼らを救って欲しいと、パウロはそのように言うのです。もちろん、一度救われた者は救いを失うことはない、8章で教えました。ですから、救われたパウロが減びることはあり得ないのです。しかし、パウロはここで彼らに対して自分がどのような思いをもっていたのかを証しているのです。私たちもよく分かります。もし、自分の愛する者が救われるのなら、自分は地獄に行っても構わないというのは、多くの皆さんがもつ思いでしょう。彼らを愛すれば愛するほど喜んで自分は犠牲になりたい、もし、彼らが救われるのなら…と。

「のろわれる」、たとえば、キリストから引き離されるようなことがあったとしても、それで愛する者たちが救われるのなら、「のろわれた者となることさえ願いたいのです。」と言います。パウロは自分の家族のことだけ、親族だけを言っていない。イスラエル民族が救われることを願っています。もちろん、私たちは自分の家族、親族や友人が救われて欲しいと願いますが、同じように考えるなら、この日本の国民が救われるためなら…と願うはず。しかし、恥ずかしいことですが、そのような思いはなかなか持っていません。逆に、どちらかというと、私たちは、このような人々はさばかれても仕方ないと思っていないですか？パウロはそうではなかったのです。自分の愛するイスラエル民族が一人でも救われることを、いや、願わくば、すべての者が救われることを願っていたのです。このような愛をもっていたのはパウロだけではありません。

モーセもそうでした。覚えておられますか？モーセがシナイ山に上ってしばらく経ったとき、下で待っていた群衆はモーセがいったいどうなってしまったのか？彼が帰って来ないので、彼らはアロンの所にやって来て、自分たちをエジプトから連れ上ってくれた神を造れと言いました。そして、彼らは金の子牛を造りました。彼らが騒いでいるところにモーセが山から下って来ました。その時に神の審判が下りました。3000人の人々が殺されました。その出来事があった翌日に、モーセが何をしたのか？出エジプト32：30-32にそのことが記されています。「翌日になって、モーセは民に言った。「あなたがたは大きな罪を犯した。それで今、私は主のところへ行って行く。たぶんあなたがたの罪のために贖うことができるでしょう。」：31 そこでモーセは主のところへ戻って、申し上げた。「ああ、この民は大きな罪を犯してしまいました。自分たちのために金の神を造ったのです。：32 今、もし、彼らの罪をお赦しくださるものなら——。しかし、もしも、かないませんなら、どうか、あなたがたお書きになったあなたの書物から、私の名を消し去ってください。」、このようにモーセも同じことを言うのです。救われた者が絶対に救いを失うことはありません。しかし、彼の心は、もし罪を犯したこのイスラエルの人々が救われるのなら、私が滅んでも地獄に行ってもかまわないと言うのです。彼らはこれ程の愛をもっていました。

私たちが考えなければいけないことは、私たちはそのような愛をもって人々を見ているかどうかということです。悲しいことに、私たちのこの国において多くの人たちが今この瞬間も滅びに向かっています。私たちはそれを見て何とも思わないのかどうかです。E・ジョンソンというダラス神学校でも教えられた牧師先生が、このようなことを記しています。彼はある人がその友人に話したことを聞いたと言うのです。二人の会話です。ある人がその友人にこう言います。「あなたの教会の牧師を辞めさせたと聞いたけど、いったい何が問題だったのか？」、すると、友人はこう答えました。「実は、彼はあなたた

ちは地獄に行くといつも語り続けたのです。」「では、新しく来られた牧師はどんなことを話しているの?」「新しい牧師も同じようにあなたたちは地獄に行くと言いつづけている。」、それを聞いた人は「では、同じことでしょうか。」「と言ったところ、その友人はこう答えるのです。「同じではないんだ。前の牧師がその話をしたときは彼はどうも喜びながらその話をしていた（つまり、会衆が減ることを望んでいたのでしょうか?）。しかし、新しい牧師が語るときには、あたかも彼の心が引き裂かれているかのように話をするのだ。』と。大切なことを分かっていただけだと思います。私たちは私たちの周りにいるだれでも、どんなに小さな人でも、その人が滅びに行くことに対して心を痛めているかどうかです。悲しんでいるかどうかです。

なぜなら、キリストを知らずに滅んだ人は永遠の地獄です。その人にはもう救いはないのです。その人は永遠に苦しみの中を過ごし続けて行く訳です。なぜ、私たちはそのことを知っていながら黙っているのかです。皆さん、9月に入ってキリストの福音を語りましたか?教会に来た人にはありません。私たちが会えるいろいろな人たちにキリストの福音を語っているかどうかです。パウロはそうしました。なぜなら、パウロはイエス・キリストを知らない人たちが永遠の地獄に向かっていくことを知っていたからです。そして、彼ら愛するがゆえに、彼らにとって最も大切なことを知らせようと思ったのです。それはこのイエス・キリストによる救いです。パウロはまず最初にそのことを私たちに証するのです。パウロもモーセも同じような心を持っていました。キリストの救いを宣べ伝えようと。救われている私たちはどうですか?

B. イスラエル人の祝福 4-5節

4-5節を見ると、イスラエル人に与えられた数々の祝福が記されています。どんなにイスラエルの人々が祝されていたのか、また、祝されているかをパウロは教えるのです。4節の初めに「**彼らはイスラエル人です。**」とあります。「イスラエル」という名前が与えられたのはヤコブにでした。ヤコブがペヌエルで神と戦った時にこのように言われました。創世記32:28「その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ。」と。「イスラ」とは「戦う」という意味であり、「エル」は神の名です。そのような名前がヤコブに与えられたのです。また、イスラエルというのは「神によって選ばれた祝福された民」という呼び名です。ですから、このイスラエル、イスラエル民族にはすばらしい特権が与えられています。神に選ばれた者たちだからです。そして、その特権をパウロはここに八つ上げています。

1. 子とされること

「子とされることも、」とあります。子どもとされるという意味です。

a) 初子：出エジプト4:22「そのとき、あなたはパロに言わなければならない。主はこう仰せられる。『イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。』」、このように呼ばれる国民は他にいません。あなたは「わたしの子、わたしの初子である。」と。また、申命記7:6にも「あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。あなたの神、主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。」とあります。

b) 神の所有：出エジプト19:5-6「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。:6 あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」

c) わたしの子：ホセア11:1「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。」

ご自分の宝の民とした、神の所有とされている、わたしの子である、イザヤ43:20も「…わたしの民、わたしの選んだ者に…」とあります。つまり、このように旧約聖書のみことばは、イスラエルの人々は特別に神によって選ばれた者たち、「わたしの子」であると言われたと記しているのです。そのように扱われている国民が他にありませんか?神ご自身が「わたしの子、わたしの初子である。』」と言われたのはイスラエルだけです。でも、このように呼ばれたからと言って、これは救いのことを言っているわけではありません。神はそのように呼ぶことによって、この世界にあつて神の証をするためにイスラエルを特別に選んだのです。

2. 栄光

「**栄光も、**」とあります。彼らは神の栄光を見せられたのです。目に見えない神が見える形でご自分を現わされたのです。幕屋が完成したとき、神殿が完成したときに、また、イスラエルの民がエジプトを出て荒野を旅するとき神は雲として火の柱としてご自身を現わされました。幕屋が完成したときは、出エジプト40:34-35にこのように記されています。「そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄

光が幕屋に満ちた。:35 モーセは会見の天幕にはいることができなかつた。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。」と、すごい光景が想像できます。「雲」は神の臨在を表わしています。ですから、モーセもそこに近づけなかつたのです。そこに神が臨在しておられることが分かつたからです。神殿ができたときもそうでした。歴代誌第二 7 : 1-2 「ソロモンが祈り終えると、火が天から下って来て、全焼のいけにえと、数々のいけにえを焼き尽くした。そして、主の栄光がこの宮に満ちた。:2 祭司たちは主の宮にはいることができなかつた。主の栄光が主の宮に満ちたからである。」、このように幕屋の完成のときも神殿の完成のときも人々は近づけなかつたのです。なぜなら、そこに主の栄光を見たからです。このような特権に与つたのはイスラエルだけでした。パウロはそのことを言うのです。

3. 契約

三つ目に、「契約も、」と記されています。神はイスラエルとの間に契約を結ばれました。みことばを見ると、八つの契約が記されています。エデンの契約、アダムの契約、ノアの契約、アブラハムの契約、モーセの契約、パレスチナの契約、ダビデの契約、新しい契約です。余談ですが、この契約には二種類あります。条件付きの契約と無条件の契約です。

a) **条件付きの契約** : 人間がその責任を果たすなら神が働きを為されるという、条件が付いています。

八つの契約の中でエデンとモーセに条件が付いています。

b) **無条件の契約** : 私たちが何をしようとも、神がお決めになったことを神が決められたときにされます。エデンとモーセ以外には条件が付いていません。

しかし、このように神はイスラエルとの間に契約を結ばれたのです。創世記 12 : 1-3 にアブラハムとの契約が記されています。「その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

ここには三つのことが約束されています。

(1) **個人的約束** : アブラハム個人に対する約束です。神は彼を「大いなる国民」にすると約束されました。

(2) **国家的約束** : 二つ目は、国に対する約束です。それは大いなる国民が現われて、彼らに土地が与えられるということです。実際に、この土地に関してはエゼキエル書、アモス書にも記されていますが、この2節の他にも 12 : 7、13 : 15、15 : 18-21、17 : 7-8 に見ることができます。今、パレスチナの地にイスラエルの国が存在しています。預言通りです。あの地は神がイスラエルに与えられたのです。みことばは私たちにそのことを教えています。

(3) **全世界に関する約束** : アブラハム個人が祝されただけではない、大いなる国民が現われて来るというだけではないのです。三つ目は、アブラハムを通して全世界が祝されるということです。その約束は救世主によって成就されます。

こうして、神はアブラハムとの間に契約を結ばれたのです。ダビデに関してもそうでした。ダビデとの契約を通して、ダビデの家系から永遠の王が出て来るということ、その約束はイエス・キリストによって成就するのです。Ⅱサムエル 7 : 8-16 「今、わたしのしもべダビデにこう言え。万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを、羊の群れを追う牧場からとり、わたしの民イスラエルの君主とした。:9 そして、あなたがどこに行っても、あなたとともにおり、あなたの前であなたのすべての敵を断ち滅ぼした。わたしは地上の大いなる者の名に等しい大いなる名をあなたに与える。:10 わたしが、わたしの民イスラエルのために一つの場所を定め、民を住みつかせ、民がその所に住むなら、もはや民は恐れおののくことはない。不正な者たちも、初めのころのように重ねて民を苦しめることはない。:11 それは、わたしが、わたしの民イスラエルの上にさばきつかさを任命したころのことである。わたしはあなたをすべての敵から守って、安息を与える。さらに主はあなたに告げる。『主はあなたのために一つの家を造る。』:12 あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。:14 わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。:15 しかし、わたしは、あなたの前からサウルを取り除いて、わたしの恵みをサウルから取り去ったが、わたしの恵みをそのように、彼から取り去ることはない。:16 あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」

ですから、このような契約をいただいた民はイスラエルしかいないのです。

4. 律法が与えられること

「律法を与えられることも、」とあります。神から直接十戒をいただいたのはイスラエルでした。神の命令を直接いただいたのはイスラエルだけでした。

5. 礼拝

「礼拝も、」と記されています。このことばは「神に仕える礼拝」、また、「宮で仕える」という二つの意味があります。

(1) 神に仕える礼拝：確かに、イスラエルの人々は神を礼拝する特権をいただきました。幕屋でどのように礼拝するのか、ヘブル9：6「さて、これらの物が以上のように整えられた上で、前の幕屋には、祭司たちがいつもはいつて礼拝を行なうのですが、」、神殿でどのように礼拝するのか、ルカ18：9-14「自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。：10「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。：11パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。：12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』：13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』：14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」、また、家族での礼拝についても教えられています。私たちがこのようなことを聞いたならこう答えなさいと、出エジプト13章に記されています。13：14-16「後になってあなたの子があなたに尋ねて、『これは、どういうことですか。』と言うときは、彼に言いなさい。『主は力強い御手によって、私たちを奴隷の家、エジプトから連れ出された。：15 パロが私たちを、なかなか行かせなかったとき、主はエジプトの地の初子を、人の初子をはじめ家畜の初子に至るまで、みな殺された。それで、私は初めに生まれる雄をみな、いけにえとして、主にささげ、私の子どもたちの初子をみな、私は贖うのだ。』：16 これを手の上のしるしとし、また、あなたの額の上の記章としなさい。それは主が力強い御手によって、私たちをエジプトから連れ出されたからである。』

また、ヨハネの福音書4章には「真の礼拝」について教えています。ヨハネ4：21-23「イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。：22 救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。：23 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。」、ですから、確かに、イスラエルの人々はこの礼拝について神から教えられた民です。

(2) 宮で仕える：このことに関しては、モーセに与えられたいけにえやいろいろな儀式がありました。出エジプト29：43-46「その所でわたしはイスラエル人に会う。そこはわたしの栄光によって聖とされる。：44 わたしは会見の天幕と祭壇を聖別する。またアロンとその子らを聖別して、彼らを祭司としてわたしに仕えさせよう。：45 わたしはイスラエル人の間に住み、彼らの神となろう。：46 彼らは、わたしが彼らの神、主であり、彼らの間に住むために、彼らをエジプトの地から連れ出した者であることを知るようになる。わたしは彼らの神、主である。」、このようなことを守りなさいと教えられたのです。

ですから、いずれにしろ、パウロがここで言っていることは、このイスラエル民族だけが神を礼拝すること、神に仕えることに関しても教えられた、そのような民は他にはいないということです。特別に子どもとされること、栄光を見ることが許され、契約が与えられ、律法が与えられ、そして、礼拝に関してもこのように神はイスラエル民族を特別に扱われたということです。

6. 約束

「約束も彼らのものです。」、神がイスラエルとの間に約束を結んだのです。みことばの中にはその約束が溢れています。創世記17：7には「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。」。特に、救世主に関する約束はみことばの中に溢れています。

イザヤ書7：14「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」

→この約束が成就したことはマタイの福音書1：23に記されています。「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）

イザヤ9：6「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」

→この約束の成就はルカの福音書2：11に記されています。「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」

ですから、神はイスラエル民族にすばらしい約束を与えられ、そして、それが成就する姿を彼らは見て来たのです。このような国民が他に存在するのでしょうか？イスラエルだけがこのようなすばらしい特権に与って来たと言うのです。

7. 先祖たち

5節に「先祖たちも彼らのものです。」とあります。イスラエル民族の先祖とはだれでしょう？アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、ダビデと信仰の勇者たちが並んでいます。神が特別に用いられた人物が並んでいます。これが私たちの先祖だと誇るのも無理がありません。このような先祖たちが与えられていると言います。

8. キリスト

最後に、「またキリストも、人としては彼らから出られたのです。」とあります。キリスト、救世主はユダヤ人としてお生まれになったと言うのです。ですから、パウロは言うのです。「この国民はどれ程祝われていることか。これだけの祝福を神が与えられた国民は他にあるだろうか？彼らだけだ。」と。彼らはこのようなすばらしい祝福に与ったと言うのです。パウロはその説明をした後、これから、その彼らが神に逆らっていることを説明して行きます。これ程の大きな祝福をいただいている彼らは、もちろん、みなが信じるのではなく、神によって選ばれた者たちだけが信じると、その様子をパウロはこの後教えて行くのです。

このことを見て、皆さん、私たち信仰者も神からすばらしい祝福をいただいているではないですか？私たちがイスラエル民族に与えられたこのような数々の祝福を見ると「なぜ？」と思います。なぜ、このようなすばらしい祝福をいただいているが、このような特権に与って、救い主を拒み、救い主に逆らい続けているのか？なぜ、こんなすばらしい祝福を無駄にしているのか？と。そのように思う人は今の時代にもたくさんいます。たとえば、クリスチャンホームに生まれ育った子どもたちは、幼い頃からずっと神のみことばを聞き、みことばを教えられ、祈りの中で育っていますが、彼らはその中で選択をしなければいけません。お父さんお母さんが信じている神を信じて従って行くのか、それとも逆らい続けて行くのか？私たちに大切なことは、クリスチャンホームに生まれようが生まれまいが、私たちはみな神から恵みをいただいた者だということです。その恵みをしっかり覚えて、その恵みをくださった神を覚えて、その方にしっかりと従って行くことです。これだけの恵みを私たちにもくださった、それはもうすでにパウロが教えてくれました。私たちが神を選んだのではなく、神があなたを選んでくださり、神があなたを救いへと招いてくださったのです。あなたの功績によるものではありません。神の一方的な恵みによってあなたはこのように祝されているのです。

では、その祝福をいただいている者として、それに相応しい生き方をしているかどうかを私たちは考えなければいけません。神に対して正しく生きているかどうか、そして、私たちの感謝、喜びを証しているかどうか、それは私たちが考えなければいけないことです。信仰者である私たちはそのことをしっかり考えて正しい選択をすることです。神の前に喜ばれる生き方をもって感謝を表わして行くことです。

5節の最後のことばに目を留めて終わりたいと思います。パウロはこのようにイスラエル民族に与えられたすばらしい祝福、特権を話して来ましたが、最後にこのことばで5節を締めます。「このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたえられる神です。アーメン。」、パウロはここでこのように言います。「人としてこの世に来てくださったイエス・キリスト、この方は万物の上おられ、すべてを支配しておられる方だ。」と。同時に、彼は「彼はとこしえに称賛を受けるにふさわしい神だ。」と。新改訳聖書ではこのことを明確に訳しています。実は、この箇所は非常な議論を呼んでいるのです。というのは、写本には、今、私たちがこのように日本語で見っていますが、句読点「、」がないのです。そうすると、読んでいてどこで区切るのか、どこが繋がっているのか非常に難解です。でも、その当時の人々はそれで分かったのです。私たちが今それを見ると非常に分かりづらいのです。ですから、いろいろな説が出るのです。特に、二つの大きな節がありますが、この5節でパウロが言わんとしたことは、この新改訳聖書が訳している通り、イエス・キリストがいったいだれなのか？イエス・キリストの神性を明確に教えているのです。

つまり、パウロが言いたかったことは、このイエス・キリストは私たちを救うために人としてこの世に来てくださった、でも、この世に来られたお方はすべてを支配しておられ、すべての上に臨在なさる真の神である、永遠に人々から被造物から誉め称えられる存在であるということです。驚くべき真理です。神があなたを救うために来てくれた。この神が自ら進んでご自分のいのちをあなたのために犠牲にしてくださいました、驚くべき恵みです。でも、その恵みによってあなたは救いに与ったのです。だから、覚えておかなければいけないのです。神がどんなに大きな犠牲をあなたのために払ってくださったのかということです。それに答えるのはあなたの責任です。

信仰者の皆さん、感謝を忘れてはいけません。そして、私たちにできることは、この主を愛して、そして、主を愛するということが主の教えに従い続けて行くことです。そのように歩んで、あなたの感謝、愛を現わしてください。神はこのようにすばらしいみわざを私たちのために為してくださいました。